

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12962

研究課題名（和文）シカゴ万国博覧会の文学的受容を通じた世紀転換期アメリカ文学の形成

研究課題名（英文）The Shaping of American Literature at the Turn of the Twentieth Century through the Literary Reception of the Chicago World's Columbian Exposition

研究代表者

宮澤 文雄（Miyazawa, Fumio）

島根大学・学術研究院人文社会科学系・講師

研究者番号：00749830

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1893年に開催されたシカゴ万国博覧会と世紀転換期のアメリカ文学の関係を検証した。19世紀の終わりから20世紀のはじめにかけてのアメリカ小説を対象に、万博というナショナル・イベントは、政治・経済・産業面に大きな影響を与えただけでなく、当時の文学の形成にもかかわる重要な出来事だったことを明らかにした。研究を通じて、シカゴ万博に関係した作家が多かったこと、そのかわり方が様でないこと、万博の影響が現代にまで続いていることなど、万博と文学の関係性を幅広く検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の博覧会研究と文学研究の死角となっていた博覧会と文学の結びつきを分野横断的に検討することを通じて、万博小説研究という新たな研究視点を提示することを目指した。これまで伝記的関心にとどまっていた作家の万博体験に注目し、その後創作された作品のうちとくに万博の影響を受けたものを万博小説とみなし、世紀転換期のアメリカ文学の一つの特徴として位置づけを試みた。また、その影響が20世紀以降の作品にもみられること、博覧会と文学者は創作に限らず多様な関係を持つことを確認し、一研究領域として展開できる可能性を示した。

研究成果の概要（英文）：This research project examines the connection between the 1893 Chicago World's Columbian Exposition and American literature at the turn of the century. This study of American fiction from the late nineteenth century to the early twentieth century reveals that the World's Fair had a significant influence not just on politics, economics, and industry, but also on the literature of that period. Through this project, I have presented a wide range of relationships between exposition and literature, including the fact that many American writers were associated with the Chicago World's Fair, that their involvement was not uniform, and that the influence of the fair continues to contemporary American literature.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：シカゴ万国博覧会 世紀転換期 アメリカ文学 万博体験 セオドア・ドライサー ライマン・フランク・ボーム ラフカディオ・ハーン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1851年のロンドン万国博覧会から始まった博覧会に関する研究は、日本でも1970年の大阪万博を契機に、技術、産業、デザインなどの観点から多岐に及ぶ研究成果が挙げられてきた。とくに近年では、佐野真由子を中心に、外交史、法制史、美術史、工芸史、建築学、思想史、文化人類学、地理学を専門とする総勢25名の研究者によって、2015年に『万国博覧会と人間の歴史』という万博論集が編まれ、2020年には第二論集『万博学』を発表するなど、大阪・関西万博の開催を直前に控えるなかで、国内の博覧会研究は様々な専門分野を巻き込みながら拡がりを見せている。

いっぽう、本研究課題が対象とする1893年のシカゴ万国博覧会については、開催国のアメリカにおいて優れた研究が数多く存在する。とくに1970年代の終わりから90年代にかけて、R・リード・バジャー、ロバート・W・ライデル、ロバート・ムーチグロツソらによる画期的な研究が相次いだ。2000年代に入っても、ハイム・M・ローゼンバーグ、スタンリー・アップルバウム、ジョセフ・グスタティスらの総覧的な研究や、アフリカ系アメリカ人の側からシカゴ万博のあり方を検証した“*All the World is Here!*”: *the Black Presence at White City* (2000)、パピリオンの一つである女性館の図書室の歴史的意義を論じた *Right Here I See My Own Books: The Woman's Building Library at the World's Columbian Exposition* (2012)、万博と人類学の依存関係を論じた論文集 *Coming of Age in Chicago: The 1893 World's Fair and the Coalescence of American Anthropology* (2016) など、多様なテーマのもとで研究が進められている。21世紀の現在、博覧会その自体はすでに一定の役割を終えたように思われるが、万博研究に関しては国内外問わず未だ活発である。

そうした動きのなかで研究視点の見直しも進んだ。とくに吉見俊哉の『博覧会の政治学』(1992)と大井浩二の『ホワイト・シティの幻影』(1993)は重要で、展示品やパピリオンの意匠、開催委員会といった主催者側の視点に偏りがちだった従来の研究を修正し、観客に論点を移した新しいアプローチを試みた。

本研究課題は、吉見や大井が提供してくれた視点を共有し、従来の万博研究および文学研究の両分野において死角となっていた文学者の万博体験に注目した。実際、万博が開催された当時、フランシス・ホジソン・バーネット、ライマン・フランク・ボーム、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ、セオドア・ドライサーなどの作家たちがシカゴ万博を訪問し、それを題材とする作品を書いたり、訪問記事を発表したりと様々な反応を示している。しかしながら、従来の文学研究では、作家の万博体験は伝記的な関心にとどまり、その体験と創作の関連性に注目することはほとんどなかった。そこで本研究は、世紀転換期のアメリカ作家を中心にシカゴ万博とのかかわりとその後に生まれた文学作品への影響を考察し、シカゴ万博の登場を世紀転換期のアメリカ文学にかかわる問題として捉えていく研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究課題では、従来の万博研究と文学研究の両領域において十分に検討がなされてこなかったシカゴ万博とアメリカ作家の関係性を明らかにする。1893年に開催されたシカゴ万博に少なからぬアメリカ作家たちが関心を抱き、現地を訪問していた事実に着目し、万国博覧会というナショナル・イベントの影響を世紀転換期の文学の展開のなかで捉えることによって、ボームの *The Wonderful Wizard of Oz* (1900) とドライサーの *Sister Carrie* (1900) といったこれまで一緒に論じられることの少なかったファンタジーと自然主義の作家作品を包括する視点を設定する。そのうえで、世紀転換期の作家たちの万博体験から生まれた作品の分析、同時代の作家作品の比較分析をおこない、同万博が当時の文学の表現に与えた影響を明らかにし、「万博小説」を世紀転換期のアメリカ文学の特徴のひとつとして提示する。そして、博覧会と文学を結びつける領域横断的な考察を通じて、博覧会の文学的受容を究明することにより、博覧会の出現を同時代の文学の形成にかかわる問題として捉え直す新たな研究視点を提供することを目指す。

3. 研究の方法

事前にリストアップしていた作家たちについてシカゴ万博とのかかわりを探るべく、作品、自伝、手紙、新聞記事などの一次資料の精査を経て、万博に対する作家たちの関与を時間軸に沿って整理し、相互に対比しつつ、各々の作家の独自性を析出した。同時に、当時のシカゴ万博をとり巻いていた言説を調査するにあたり、とくに1897-98年にニューヨークのアップルトン社から刊行された同万博についての重要な報告書の一つである *A History of the World's Columbian Exposition held in Chicago in 1893* (1897-98) 全4巻の復刻版を大いに利用した。また、調査の過程で新規に確認されたシカゴ万博関係作家のうち、とくにラフカディオ・ハーン(小泉八雲)については本研究を遂行するうえで有益であると判断したため、重点的に調査を行った。さらに、研究が進むなかで、シカゴ万博の影響は同時代の作家作品だけでなく、20世紀以降の文学にも及んでいる可能性が見出されたため、F・スコット・フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* (1925) やエリック・ラーソンの *The Devil in the White City* (2003) などの20世紀以降の作家作品に対してもシカゴ万博の文学的受容を検討した。

4. 研究成果

(1)シカゴ万博関係作家リストの更新と考察

本研究課題では、シカゴ万博関連の資料を十分な時間をかけて調査することができたおかげで、同万博の関係作家リストを想定以上に更新することができた。

上述のバーネット、ボーム、ハウエルズ、ドライサーに加えて、ヘンリー・アダムズ、キャサリン・リー・ベイツ、メアリー・ヘイスティングス・ブラッドリー、ヘンリー・カイラー・バナナ、クララ・ルイズ・バーナム、エドガー・ライス・バロウズ、メアリー・ハートウェル・キャスターウッド、ジョージ・ワシントン・ケイブル、ホバート・チャットフィールド・テイラー、メアリー・キャサリン・クロウリー、リチャード・ハーディング・デイヴィス、ユージン・フィールド、ヘンリー・ブレイク・フラー、ハムリン・ガーランド、ウィリアム・ハミルトン・ギブソン、イーディス・オグデン・ハリソン、ジュリアン・ホーソーン（ナサニエル・ホーソーンの息子）、ロバート・ヘリック、マリエッタ・ホリー、オリヴァー・ウェンデル・ホームズ、サラ・オーン・ジュエット、ハリエット・モンロー、ジョン・ミュア、トマス・ラッセル・サリヴァン、マーク・トウェイン、チャールズ・ダドリー・ワーナー、メアリー・ハワード・ウィーデン、アイダ・B・ウェルズ、オーウェン・ウィスターなど、実に多くのアメリカ作家がシカゴ万博にかかわっていたことが判明した。作家ごとの万博へのかかわり方は、当時の年齢、職業、状況などによって様々であるため、現時点では個々のケースを精査するまでには至っていないものの、多数の作家がシカゴ万博に反応していたという事実が物語っているように、同万博はアメリカ文学の領域において紛れもなく記念碑的なイベントだったと言え、この調査成果は本研究に貴重な示唆をもたらした。

また、調査の過程で英・仏の作家たちの訪問も把握できたことも収穫だった。これにより、これまでの国家単位の万博文学研究ではなく、トランスナショナルな枠組みからの考察の可能性を得ることができた。

(2)シカゴ万博のアメリカ小説への影響

研究を開始した2020年度より、ライマン・フランク・ボームとセオドア・ドライサーの二人の作家を研究対象の中心に据え、それぞれが代表する大衆文学とリアリズム文学の観点から、シカゴ万博の文学的受容を検証した。

具体的には、ボームは、バーネットらと同様に、通常「大衆作家」として位置づけられるが、ここで問題にしたのは大衆の欲望を忠実に反映してしまうその大衆の想像力である。この点について消費文化と帝国主義の観点から作品を分析し、その推定の妥当性を高めた。また、その大衆性についてさらに考察を進め、シカゴ万博のイデオロギーがその後の時代にも共有されてゆく背景に、多くの読者を獲得し、そのイメージを無反省に拡散浸透させた大衆文学の関与があることを検討した。

いっぽうで、リアリズム作家のドライサーは、ハウエルズらと同様に、創作を通じてシカゴ万博のイデオロギーを否定する側に立つと想定し、新聞記者時代に手がけた万博訪問記事、当時を回想した自伝、そして生涯にわたって描き続ける都市小説作品の記述を比較分析した。その結果、一部の先行研究でも指摘されているように、デビュー作 *Sister Carrie* (1900) の時点ですでに、ドライサーのなかでは万博体験で抱いた都市の幻想性が破綻しつつあったという見解を導いた。そこからさらに検討を進めて、ドライサーはそれ以降の作品でも様々な登場人物に仮託して何度も都市の幻想性を否定しなければならなかったことから、万博に対する作家の応答は、一時的かつ表層的なレベルに終わらず、深層レベルで作用し続けるケースもあることを捉えた。このように、シカゴ万博が作家に与えた影響は、直接に作品の主題となる場合もあれば、はっきりと具体的な形をとれないほど創作全般に浸透している場合があるなど複雑多岐にわたり、同万博が世紀転換期のアメリカ文学の形成に広く深くかかわっていたことが徐々に明らかになった。

そして、上記の調査結果の一部を、2021年の日本英文学会東北支部第76回大会シンポジウム「英米文学における記憶と想像力」(オンライン開催)において、「白い幻影 シカゴ万国博覧会の記憶と文学」の題で口頭発表をおこなった。本シンポジウムをきっかけに記憶と想像力の結びつきに注目したおかげで、ドライサーの万博体験の意味を自伝(記憶)と創作(想像力)の連動性のなかで掘り下げられ、本研究テーマの理解をいっそう深めることができた。その後、2022年3月に日本英文学会東北支部ホームページ上で大会報告をおこなった。

研究期間中、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により、予定していた米国シカゴでの現地調査が実行できなかったため、万博関係作家についての網羅的な調査を保留し、研究計画を前倒しにして、20世紀以降の文学作品にみられるシカゴ万博の影響について検討を始めた。とくに重点的に調査したのは、モダニズム作家フィッツジェラルドの都市小説 *The Great Gatsby* である。本作には文学上の表現から登場人物にまでシカゴ万博のイメージや先行する万博小説の影響が認められた。2022年に発表した論文「ドロシーの娘たち」では、ボームとドライサーとフィッツジェラルドが描く女性登場人物たち(ドロシー、キャリア、デージー)が共有する都市消費資本主義のパラダイムがシカゴ万博に由来するものであることを指摘し、フィッツジェラルドの文学をボームとドライサーと同じように万博小説の系譜に連なる作品と位置づけ、シカゴ万博と文学の関係性を通史的に検討した。ほかに、都市の破壊性を描く50年代の小説、1939年のニューヨーク博を扱ったE・L・ドクトロウの *World's Fair* (1985)、シカゴ万博で発生し

た連続殺人事件を描いたエリック・ラーソンの *The Devil in the White City* (2003) などのように、シカゴ万博の文学的受容の影は 20 世紀を越えて現代にまで及んでいるということが分かり、本研究を土台とした今後の研究の展望が得られた。

(3) ラフカディオ・ハーンにみる博覧会と文学者の多様なかわり

上述のとおり、新型コロナウイルスの感染拡大により、研究計画を一部保留し、全体の計画を前倒しにしたため、早期の終了も考えられたが、一時日本とシカゴ万博の関係に目を移した際に、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が日本人彫刻家に協力して出品させていたことが分かり、そこから関心を持って調査を進めるうちにハーンが様々な博覧会と多様なかわりをもっていた作家だったことが判明した。そのような発見から、万博と作家の関係を創作面に限らず、様々な可能性のなかで探ることができるようになり、より柔軟なアプローチで本研究を進めることができた。

このことにより、研究期間の後半からはニューオーリンズ万博や日本国内で開催された大小の博覧会といったシカゴ万博以外の博覧会も調査対象に含まれるようになった。そのため研究上の関心がやや拡散したきらいがあるかもしれないが、研究当初には想定していなかった観点から取り組めたことで、アメリカの博覧会通史や、欧米で始まった博覧会が日本へ波及していく歴史的な文脈についての理解が深まり、博覧会と文学の関係を考える際には、個々の博覧会の特殊性やそれによってもたらされる社会的意味の複雑さを考慮に入れて検討する必要性があることなど、本研究を遂行するうえで重要な理解と気づきを得た。

そうした見地から、ハーンという一人の文学者に絞って博覧会との関係を徹底して追及できたため、博覧会と文学者の関係を深く掘り下げて丁寧に考察することができた。その結果、ハーンの場合には、ニューオーリンズ万博での日本館訪問がその後の日本行きにかかわる決定的な体験だったこと、そこでトランスナショナルな知的交流や人的ネットワークの構築がおこなわれたこと、創作活動が文学作品に限らず新聞記事、ガイドブック、レシピ本、俚諺集と多岐に及んだこと、来日以降も国内の様々な博覧会を精力的に訪問したことなどが新たに確認でき、博覧会体験は一人の文学者を通して実際に様々な意味を持つことが明らかになった。

上記の調査から得られた成果の一部を、2022 年 12 月に松江市立図書館で開催された小泉八雲講座「ラフカディオ・ハーンと万博」で報告し、続く 2023 年 3 月の日本アメリカ文学会東北支部 3 月例会で「ラフカディオ・ハーンと博覧会」の題で口頭発表をおこない、それを同年 6 月に論文「ラフカディオ・ハーンとニューオーリンズ万博」として公表することができた。このハーンに関する考察は、新たな研究課題を得るきっかけにもなり、2024 年度科研費課題として申請し採択につながった。

研究期間全体を通じて、新型コロナウイルスの影響で研究計画を軌道修正し、十分に取組めない部分もあったが、いっばうで研究課題を進めていくにつれて次々と新たな課題が見出され、それによって思いがけず進展した面もあり、今回課題とした万博と文学の影響関係に関する研究は国内外を見渡しても今後も十分に発展の余地がある、という手応えを得たことが何より大きい収穫であった。総合的に判断して極めて充実した成果が得られたといえる。今後は日本をはじめとする他国の博覧会にも関心を向けながら、博覧会と文学者の関係を探り、万博文学の可能性を広げていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 60
2. 論文標題 ラフカディオ・ハーンとニューオーリンズ万博	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 へるん	6. 最初と最後の頁 4-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 42
2. 論文標題 増田渉記念室と顕彰活動について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アジア文化	6. 最初と最後の頁 62-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 46
2. 論文標題 （書評）新・アメリカ文学の古典を読む会編『物語るちから 新しいアメリカの古典を読む』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北アメリカ文学研究	6. 最初と最後の頁 62-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 17
2. 論文標題 （活動報告）子どもたちと小泉八雲を学ぶ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根大学ラフカディオ・ハーン研究会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 8-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 4
2. 論文標題 英米文学への招待	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人間と文化	6. 最初と最後の頁 278-289
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 58
2. 論文標題 「雪おんな」の尽きない謎	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 へるん	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 55
2. 論文標題 ドロシーの娘たち	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東北	6. 最初と最後の頁 63-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 -
2. 論文標題 (プロシーディングス) 白い幻影 シカゴ万国博覧会の記憶と文学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本英文学会東北支部HP	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮澤 文雄	4. 巻 98
2. 論文標題 (書評) 吉田恭子・竹井智子編著『精読という迷宮 アメリカ文学のメタリーディング』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 125-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20759/elsjp.98.0_125	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 58
2. 論文標題 (書評) 常松正雄訳・村松真吾編『ラフカディオ・ハーン 西田千太郎 往復書簡』(八雲会、2020年)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 へるん	6. 最初と最後の頁 121-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 -
2. 論文標題 (書評) 小泉凡監修『怪談づくし』(八雲会、2021年)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山陰中央新報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮澤文雄	4. 巻 14
2. 論文標題 (研究小論) 震災と記憶と樹木	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 島根大学ラフカディオ・ハーン研究会ニューズレター	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 宮澤文雄
2. 発表標題 ラフカディオ・ハーンと博覧会
3. 学会等名 日本アメリカ文学会東北支部3月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮澤
2. 発表標題 ラフカディオ・ハーンと万博
3. 学会等名 松江市立中央図書館定期講座「小泉八雲に学び・親しむ」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮澤文雄
2. 発表標題 白い幻影 シカゴ万国博覧会の記憶と文学
3. 学会等名 日本英文学会東北支部第76回大会SYMPOSIA「英米文学における記憶と想像力」
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------